

(I)

インタビュアー：

こんにち
今日、ひとが分析をしているとき、[ふだんと]どんなまったく違うことを、ひとは語っているのでしょうか？

ジャック=アラン・ミレール：

私とはなにものであるか・・・私はなにものになったのか・・・。私はひとつの声、ラジオの声、ラジオ局のひとつの声、身体から切り離された、声以外のなにものでもありません。声とは、目に見えないもの、私は自分が見えないものになったと感じます。話していますが、私はたったひとりで話します。私はこのスタジオで、たったひとりで話しています。しかしあなた、あなた方皆さんは、そこにいます。私にとってあなた方は非常に存在感があります。あなた方のために私は話しているからです。黙っているあなたのために、私が概念でしか知らない多くの聴衆のために、あなたのために、大衆のために、話しています。あなた、どんなあなたであれ、だれであれ、あなたのために。そこには大きな耳が待ち受けているのです。

よろしい。とどのつまり、それは精神分析と違ってはいません。ここではマイクを前にして、ひとりで私は話していて、あなたは、そこにいたりべつのところにいたりして、私のことを聞いています。それは私が自分の分析していた頃を思い出させます。私は週に4回、分析家のところへ行っていました。私は寝椅子に直行して、そこに横たわり、話しました。分析家を見ることなく話しました。私はひとりで話しましたが、分析家はそこに存在していました。彼は私のことを聞いていました。どれくらいの長さ聞いていたのかは、訊かないでください。私は一度も時計を見ることはしませんでした。それはとても長い時間というわけではありませんでした。というのも、私はラカン派分析家たちのところにしか、分析に行かなかったからです。

精神分析とは、ひとがそう考えているのと反対に、対話ではありません。それはむしろモノログです。いわば、多くの時間、精神分析はモノログなのです。ときどき、稀に、場合によっては10日間、何週間か、さらには何か月も、分析家が話すのをひとは待つことがあります。分析家はなにかを言います。分析家があなたに言うことは、分析家が話すのが稀であればあるほど、あなたには貴重なものと思われれます。あなたが言ったばかりのこと、あなたが他の誰かには言わないことを聞く人物からそれがやってくるので、とても貴重なものだとはあなたは思うのです。

もしお望みでしたら、それらは告白です。そうですね、告白というものを、ひとは一巡するものです。ひとは告白するべきなにを、持っているのでしょうか。ひとはみじめなこと（悲惨なこと）を告白します。誰かがあなたに味わわせるみじめなことです。場合によっては自分で自分に対してでかしたみじめなこととか。恥ずべきこととか。自分で自分を非難していることがらとか。いいでしょう、ひとはマスターベーションをしますが、正直言って、それも遠い所にあるのではないでしょう。それはあることです。欲望してくれない相手を、ひとは欲望します。ひとは愛しますが、ひとは愛されません。ひとは、愛してくれているだろうひとのことを、愛しません。愛さなければいけないようには、ひとは愛しません。ひとは自分が欲望はしないひと、もしくは欲望をもはやもてない相手を、愛します。ひとは愛していない人物にたいしてだけ、欲望します。ひとは愛から愛し

ません。あるいはまた、ひとは愛しますが、その相手から享樂を得られません。

それから・・・まだなにがあるのでしょうか。あなたに対して言われた複数のフレーズがあります。あなたに永遠に刻印されたフレーズがあります。そして理由はほんとうにはわからないのですが、それらのフレーズは必ずしもそれほど知的なフレーズというわけではありません。それから、忘れることのできない複数の出来事があります。「最初の」がつく、経験とか。あなたにはそれが人生のすべてを決めたと思われるような、経験があります。

それからまた、ひとがすることを止めることができないものとか、しないことを止めることができないものがあります。ひとが持つことを止めることができない考えがあります。とりわけ、というか、ほかにも、享樂するために、ひとが助けを求めるであろう、イメージや小話というものがあります。ひとりで享樂する、あるいはときおりはパートナーと享樂するときのものです。これらのちょっとした話、シナリオというのは、馬鹿で愚かで、嫌悪感を催させる、いまわしいものとさえ言うるでしょうが、しかしながらそれこそまさに、享樂するためにひとにとっては必要なものです。それはこのひとにとってもあのひとにとっても、ぜったいに必要なものなのです。そしてよくあるように、それこそまさに、もっとも告白するのが難しいものです。そして多くの場合、ひとはそれをすぐには言いません。ひとはもちろん、分析家がそれを耐える（支える）ことができるのを待ちます。分析家は耐えます。すべてを耐えます。分析家はそのためにそこにいるのです。

そして誰かがそれを聞くということだけでも、たしかにあなたを狂わせます。それらのおぞましさ、それらの罪、欠陥、それを誰かが動揺しないで聞くのですから。あなたの不健康な考えとか。恥ずべき享樂とか。誰かがなにも言わずに、あなたを外に追い出すのでもなく、教訓を垂れることもせず、それらを聞くのです。あなたの方はといえば、あなたはそこに存在しています。どう言ったらいいのでしょうか、そう、あなたの資料を、内密な資料を誰かと分かち合います。犯罪的な資料を、あなたは誰かと分かち合うのです。それもあなただけが知っている資料を、です。というのは至るところに、あなたは資料を—行政上の資料とか—もっているでしょうから。その資料には、もちろん、完全に秘密保持が保証されていますが、しかし問題はそういうことではありません。すべてが示すのは、それにしまいいは接近することになるということです。知によって接触するのです。存在してはならない資料に接触するために、いつも誰かがいるものです。その資料は空中にさらしてはならないし、もしそうなれば、それは問題を起こすことでしょう。

しかしその資料とは、まさに、あなただけがそれをよく知っている人物です。あなたが内密のものと思う資料は、場合によっては誰もあなたにしないような非難であり、あなただけが定式化すべきものです。そのもっとも内密な資料を、あなたは分かち合うのです。あなたは分かち合うのですし、そのプライベートな劇場では、あなたは被告人であると同時に検事、そして弁護士でもあります。よろしい。かりにそう言ってよければ、精神分析家は裁判官ということになりますが、それは機能からいって、寛容な裁判官です。この裁判官はアーメン、とは言いません。分析家はたんに、「では次回に」みたいなことを言うだけです。しかしそれは、こう言って良ければ、無罪放免（赦し）に値します。

あなたはあなたの分析家に罪を負わせる（分析家を被告人にする）こともできるのです。あなたはその場合、分析家の検事となります。それは起こりえます。分析をしている場合、ひとはそれらを理解できるでしょう。あなたにとって、分析家はなにもしていないじゃないか。分析家は本当に聞いているのか。どうしたらそれが分かるのか。どうして分析家は何も言わないのか。あるいは、ど

うしてこんなにも話すことが少ないのか、どうしてこんなにも脇にいるのか。なぜ分析家からこんな物音がするのか。紙でもあるのか。ひょっとしてため息ついたんじゃないか。もしかしたら分析家は無関心なのではないか。あるいは、いま自分が言ったことに、分析家はあまりに興味を持ちすぎているのではないか？考慮に値することはなにもないのに？あなたは分析家に興味をもちすぎていると思ったことについて理解することを選んだり、それともやり過ごすことを、あるいはむしろまったく気付かないことを選ぶでしょう。あるいはまた、それらをあなたはフレーズの終わりに、分析家の注意を引くようななんらかの口調で、しのびこませるでしょう。

とどのつまりは、問うのです。なにを分析家は本当に望んでいるのだろうか？この無言でいる者は、と。

それからさらに、大きな問いが存在します。分析家は私を愛しているだろうか、というものです。私に興味をもっているだろうか。分析家は私を失うことができるのだろうか。しかしこの分析家というのは、たんにあなたが罪を負わせる人であるだけではありません。あなたの弁護士でもあります。なぜならあなたは自分の繰り返す訴えを、委ねるのですから。そして委ねながら、その訴えはシンプルなものになっていきます。あなたの目にはよりクリアに、訴えはなっていきます。場合によって、訴えは修正されます。こう言って良ければ、訴えは完璧なものになっていきます。そして分析家とはいえば、なにも言いません。ものを言わぬ者は同意している、古くから、それは国家の知恵とされています。そういうわけで、分析家はあなたと共に、あなたの側についているのだという推定が存在することになります。それらすべてに分析のなかで出会います。

しかし分析は、それではありません。それらは分析の包装にすぎません。そうです。あなた、みなさんは資料を持っています。あなたが良く知っている資料、あなたが擁護している資料、あなたの弁護士のよう、あなたに有利になるようなものです。それはまたあなた自身にたいしてあなたが告発するための資料でもあります。そしてときおりは、その資料は全面的にあなたに対抗するものでもあります。あるいはそれは父親や母親に対抗するためのものです。彼らは理解しなかったから、十分には理解しなかったとか。あなたをだましたとか。彼らがやるべきことをやってくれなかったとか。彼らはやってはいけないことを、まさにやってきたじゃないかとか。よろしい。いつもどこかに、なにかが、適切などころにありませんでした。あるいはあまりになにかがあり過ぎたり、あるいは場所を占めなかったりしていました。つねになにかやり損なっているものがあります。そして誰かがしくじっていました。それはじつはあなたです。一般的にはそうです。

しかし、分析は、そういうものとは違います。あなたの資料ではありません。あなたの告白ではありません。あなたの身の上話ではありません。あなたの伝記や、あなたの家族、私が言ったような、父親、母親、兄弟、姉妹、おじいちゃん、おばあちゃん、などなど・・ではありません。中学、高校、友達、バカンス、結婚とか。私の姉妹、こう言ってよければ下着の話とか、などなど。それらすべては分析です、もちろん。それと同時に、分析とはそれらのことではないのです。

分析とは、あなたが誰にもけっして言ったことがないことを、言う、ということではありません。あなたが知っていることを言うことではありません。それはあなたが知っていないことを、言うことなのです。それはもっと強烈なものです。それはひとつの秘密です。しかし、その秘密は誰かがあなたから無理に奪うことはできません。それはあなた自身が無理に自分から奪ったものですらありません。それはあなたの資料のなかには、なかったものです。それは。本当にいちばん価値のあるものは、あなたの資料にはなかったものです。それは、どこにも書かれていません。こう言ってよければ、それは、行間に存在します。あるいはまた、こうも言えるでしょう、それは書かれては

います。でも隠顕インク[薬品または熱を使用して読めるようになるインク]で書かれています。かつてひとが、秘密の手紙を互いに交わすときに使っていたような、隠顕インクによって、それは書かれています。「三銃士」のなかにたぶん出てくるとと思いますが、無色のインクです。化学物質による作用や、反応するものとか、あるいは熱などの物理現象の影響にさらさない限り、そのインクは目に見えないままにとどまります。

みなさんはそれを、どこか映画で見たことがあるでしょう。羊皮紙を、一本のろうそくでかざすと文章が出現し、そのとき突如、読めるようになる、あれです。

よろしい。こう言ってみましょう。ここで問題となっているインク—これは隠喩、イメージですが—精神分析において問題となっているインクが読まれうるものとなり目に見えるものになるのは、ひとが精神分析のアクション（行動）に従うときだけです。つまり、あなたがた、みなさん、男性も女性もみな、秘密のメッセージに棲みつかれているということになります。それはあなた自身が、もちろん、ある秘密のメッセージであるということです。よろしい、それはあなたにとって狂った考えと映るかもしれませんが。しかしこの秘密のメッセージについて、あなたの夢は、それでもやはり、あなたにそのひとつの考えを与えるものです。あなたの夢は、ある意味をもっています。それは正確にはどのようなものでしょうか？それを考えるためにひとは親愛なるジグムント・フロイトを待ったわけではありません。昔からずっと、ひとは夢見てきましたし、夢見ることを待っていたわけでもなく、ひとは夢が解釈されるべきメッセージであると考えたのにフロイトを待っていたわけでもありませんでした。ではそれは誰のメッセージでしょうか。それはどこそこの神のメッセージとされてきました。そしてその神のことを、フロイト以降、ひとは無意識と呼んでいます。